

生活支援体制づくり協議体（地域包括支援センター佐鳴台担当圏域レベル）開催報告書

<p>1 開催日時</p>	<p>令和7年10月31日（金） 10時00分 ～ 11時30分</p>
<p>2 開催場所</p>	<p>西部協働センター 202・203講座室</p>
<p>3 参加者</p>	<p>24名</p>
	<p>委員15名（佐鳴台地区7名、城北地区8名）、関係機関9名</p>
<p>4 協議の内容</p>	<p>1. 開会</p> <p>2. 挨拶 佐鳴台・城北地区生活支援体制づくり協議体 会長</p> <p>3. 地域包括支援センター佐鳴台より</p> <p>①追分小学校での認知症サポーター養成講座について 9/10 学校運営協議会委員の会長、包括佐鳴台、CSWと同行訪問する。 福祉教育的取り組みとして「幼いころから福祉への理解を深めることで次世代の担い手へ」「子どもたちに地域の見守りの一員になってもらいたい」をテーマに小学生にも養成講座の場を設けたいことを説明し今後、取り組む予定</p> <p>②民生委員よりアンケート結果について 「地域の方と関係機関との連携について」アンケートを実施。 日頃の活動で困難や負担に感じるか？→ある10名ない24名 困難や負担を分散するために、今後制度化して欲しいことがあるか？ →ある3名ない28名</p> <p>4. 令和7年度 第1回協議体の振り返り 前回の協議体の議事録、パワーポイントを用いて各地区で出た意見を共有。</p> <p>①地域団体についての活動・実態・見守り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・世代別の集まりや団体はだんだん組織力が弱くなってきている</li> <li>・各組織やサロンの中で見守りの役割を担っている</li> <li>・誰かに誘われることが大事かもしれない</li> </ul> <p>②高齢者のとじこもり（何らかの原因で外出できない人・外出しない人）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・免許返納・体力低下（病気）・交通の不便さ</li> <li>・昔からの閉じこもり、途中から地域と疎遠、転入により周りに知り合いがいない</li> </ul> <p>↑何らかのキッカケがあれば自然な交流ができるのでは… 様々な社会資源との連携や協働することに解決の糸口になる可能性を秘めているのでは…</p> <p>5. ArrowsPlanning 代表取締役 関矢 直樹 様より ～はな葬の地域の見守りや思いについて～</p>

代表の関矢さんは福島県出身。東日本大震災を経験し「地域の孤立をなくしたい」という思いで起業した。地域にできる形を模索しながら自身の職業を通じて地域の人とつながりたい、子どもから高齢者まで誰もが立ち寄れる居場所づくりを目指している。主な活動内容として学習支援、美容イベント、地域住民との日常的な関わり等、多岐に渡り活動されている。

6. 協議事項（グループワーク）地区混合で分かれて話し合う

■協議テーマ①「はな葬の地域の見守りや思いについて」感じたこと、気付いたこと

【グループA】

- ・葬儀屋でイベントをしているイメージがなかった
- ・ホワイトストリートには葬儀屋は4件もある
- ・暗いイメージはあるが、新たな価値観→地域の活性化につながる
- ・参考になった。葬儀屋さんが貢献活動をしているなんて知らなかった
- ・孤独死をなくしたい→市内にどの程度あるのか？
- ・不登校は毎年増加している→実態は知られていない
- ・お茶を一杯で人が来る→「ちょっと一服」良いアイデア
- ・不登校、近所の子は行かないのは理解できる→どこまで介入できるのか？
- ・地元の子は来ない→隠したい人が多いのでは…近すぎるのも難しい
- ・民間の企業として→地域とは違いとっかかりやすい
- ・お金にならない→増えてもらえるものはバランス
- ・企業として地域に貢献→その時だけに動員
- ・フォーマルとは違う→インフォーマルも資源のひとつ
- ・個人情報の取扱い

【グループB】

- ・地域の信頼をどうやって得ていくのか？
- ・通常であれば人が来たがらない施設だが、幟を立ててから人が来るようになるまで、どんなことをしていったのか？
- ・元々店舗で、葬儀会社という見た目ではないので入りやすいのか？
- ・学習支援を行っているのは、佐鳴台では知られていない。位置関係から他地区の子が来るかもしれない。誰が協力しているのか？もっと広報しても良いのでは？  
→他地区も含めた傾向として、近所の人に知られたくないという思いから、他地区の会場で参加するのは自然な流れだと思う。
- ・関矢氏が福島出身とのことで、浜松で事業を展開するきっかけ、どういった思いで起業したのか知りたい。東日本大震災も関係しているのか？
- ・はな葬という言葉聞いて、「話そう」という意味も掛けているのかと感じた。
- ・イベントで地域とのつながりができる、ボランティアではなく事業として行うという切り口が今までにない。事業として取り組むことで新たな視点も見えてくるのではないか。
- ・取り組みを通じて地域に知られることは最後には社益にも繋がっていく。他の事業者も取り入れていって良いのではないか。
- ・(事業所でも個人でも)参加することにメリットを感じれば、広がってWinWinの関係になるのではないか。

【グループC】

- ・「はな葬」の基本理念。始めようとしたキッカケ  
→東日本震災を経験して「どういう企業」の形があるのか考え企業した  
子ども～高齢者まで居場所を作りたい
- ・学習支援を始めたキッカケ

- 訪問販売をしているが、平日の昼間に子どもが家に居る事を知った  
佐鳴台地区ではまだうまく周知できていない。浸透するまで時間がかかる  
学習支援について教えている人は？→はな葬のスタッフ
- 不登校の子どもが10人～15人程度来るが雨の日は来ない  
朝9時～15時で毎日、スペース（部屋）は空けてある
- ・美容イベントについて  
→友引日に、はり、マッサージ、ネイルケア等ブースに分かれ開催  
生活保護の方は無料（口頭で確認）
- ・良い場所があっても外に出ようとしない人が多い。出るキッカケを作ることが必要  
→まずは声かけ
- ・小さな見守り場所、皆が集まる場所からさらに発展できる仕組みがあると良い
- ・企業と地域との連携。他のところでも同じような活動をしてくれるとより社会資源が増える  
→期待したい
- ・今まではボランティア団体が多い。企業が率先して行ってくれると地域としてありがたい
- ・今までは小さな商店などが見守りの役割があったが今は減ってきている

■協議テーマ② 「社会資源を活用した、協力した さり気ない見守りについて」

【グループA】

- ・県住は新聞が溜まっていたら配達員が通報→宅配業者や訪問型も
- ・自治会や民生委員、シニアクラブがある
- ・若者のひきこもり→解決が難しい
- ・40代～50代のひきこもり→自立していない
- ・地区社協のふれあい訪問で何か物をもって訪問すると会えることがある
- ・年代で必要なことが違う
- ・何かあった時の連携→どのようにつながりを持つか？
- ・今あるさりげない見守りは？  
あんしんネットワークの拡充・充実

【グループB】

関矢氏からの回答

- ・トイレを使う常連の方の氏名、住所、電話番号を把握している。3日来なければ連絡すると伝えている→安否確認
- ・福島では震災があったことで逆に孤立した人がいなくなった。復興に協力する企業が地域に溶け込んで活動している。
- ・浜松にて営業で地域を廻っていて、学校へ行かず家に一人でいる子供と会うなど、課題がある家庭を見つけることがある。そういった子とコミュニケーションを取ることや、日中一人でいるなら事業所で過ごすことを提案することもある。
- ・自社の取り組みが知られることで、大手葬祭会社にも広がれば良いと思う。
- ・取り組みを広げていく中で、はな葬さんのように情報を持っている企業とどのように情報を共有するかが課題になる。

【グループC】

- ・佐鳴台協働センターの部屋をNPOが学習支援をしている。団体や学校や市など連携して支援できるといい
- ・企業がやるには資金が大変では？
- ・銀行や郵便局等、近隣から連絡が入るようになっており皆の意識が変わってきていると感じる  
→今ある見守りなども深めていけるようにしていくことが大事。

	<p>あんしんネットワークをさらに強固に作っていく。発信していく</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 蜷塚三区のイベント実行委員会→年齢を超えた関わりができる企画を考えている →11/1 聖星高校にてオータムフェア実施</li> <li>・ 興味を持ってもらう取り組みが少ない。 →「魅力ある取り組み」→作り出す人、アドバイスできる人も育成できるといい</li> <li>・ 自分から声かけしている→声をかけられると嬉しい→<b><u>声かけが大事</u></b></li> </ul> <p>7. 事務連絡</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第2回佐鳴台・城北地区生活支援体制づくり協議体会議</li> </ul> <p>日時：令和8年2月</p> <p>場所：西部協働センターまたは佐鳴台協働センター</p> <p>8. 閉会 佐鳴台・城北地区生活支援体制づくり協議体 副会長</p>
<p><b>5 今後の見通し・ 必要な対応</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 民生委員・自治会だけでなく企業、配達員、郵便局なども含めた見守りのネットワークづくりの再構築</li> <li>・ 地域資源をもっと見える化し地域住民へ広く周知→情報発信の強化</li> <li>・ 参加しやすい環境（世代を超えて参加したくなるイベントや交流の場）→声かけ、居場所、地域行事等行ってみたいと思える場を整える</li> </ul>